〈研究ノート〉

# 社交言語の生成とコード・機能の変化

## ── ファティック化という概念 ──

倉　持　益　子

**キーワード：**ファティック化，phaticalization（造語），定型化社交言語，文法化

## 1. はじめに

本稿でいう社交言語とは，「phatic communion」[1] としての言語行動，すなわち，新たな情報の伝達を目的にするのではなく，人間関係の構築や保持を目的とした言語行動のことである。これは「交感言語」と言い換えることもできる。「今日の服，いいですね」等のスモールトークの形の他，あいさつ言葉のように決まった形を持つものがある。これを本稿では，「定型化社交言語」[2] と呼ぶ。

これら「定型化社交言語（以下，「定型化」）」は，ある文脈において繰り返し使われる表現から生まれた表現である。これは元来の意味の希薄化を進ませ，それに伴いコードすなわち語形・音形も変化させていく。

この「定型化」の生成と変化は，国内で特定の概念として語られてはこなかった。本稿では，この概念を「ファティック化（Phaticalization）」[3] とし，近似概念である「文法化」との比較を試みながら紹介していく。

## 2. ファティック化の概念

「定型化」の代表的例としてあいさつ言葉を取り上げ，ファティック化とは何かを説明したい。

多くのあいさつ言葉は，かつて実質的な意味を持っていた文の一部が決まり文句として繰り返し使われるうちに，他の部分が省略され，その部分だけで役割を果すようになることで生まれた。例えば，「さようならば（これにて失礼いたします等）」が，別れを表す「さようなら」になったのが挙げられる。その「さようなら」はさらに「さよなら」「さいなら」にコード変化する。

沢木・杉戸（1999）は，そのコード変化について以下のように述べている。

> あいさつ言葉はいったん定型化すると，その語形・音形はどんどん「摩滅する」傾向が見られる。（中略）その場でコミュニケーションを実現するための対人的なふれあいを作り上げるこ

とに主眼のある phatic な言語行動があいさつであってみれば，そこでのあいさつ言葉は，きちんとした語形，本来的な語形をいちいち丁寧に言われなくても機能を果たしうる。（沢木，杉戸，1999, p. 131）

このような社交（交感）機能を持った言葉は，実質的な意味から解放されたため，社交的機能が果たせるかぎりコード変化し続け，それに伴い機能（特にポライトネス）[4] も変化していく。

以上のような言語の生成と変化の過程は，他の言語からも見つけることができる。英語の「バイバイ」がその例である。本稿は，定型化社交言語の生成を「ファティック化」，その後の変化を「ファティック化が進む」とし，両現象を広い意味での「ファティック化」という言葉で表す。

ファティック化に近い概念として「文法化」が挙げられる。大堀壽夫（2004）によると，文法化とは，それまで文法の一部ではなかった形が，歴史的変化の中で文法体系（形態論・統語論）に組み込まれるプロセスであるとする。

「自立性」を持った語が，付属語化することであるという「文法化」に対し，ファティック化は，ある状況下でよく使われていた句が自立性を持ち一語化し，交感言語の機能を担うようになることである。付属語化する文法化とは方向性が逆であろう。したがって，「文法化」とは分けて考えるべきである。

以下にファティック化の概念を定義付ける[5]。

ファティック化とは，それまで交感を主たる目的にしてこなかったコミュニケーション表現が，ファティックコード化される（交感目的のコードとなる）プロセスである。

## 3. ま と め

あいさつ言葉等の定型化社交言語が生成される過程は，今まで特定の呼び名のない現象であった。その現象は，いわゆる「文法化」とは異なる。「ファティック化（phaticalization）」という概念が成り立つことを提唱したい。

**〈注〉**

（1） Malinowski（1923）。文化人類学で用いられた。
（2） 本稿筆者の命名
（3） この命名は，井上史雄明海大学教授によるものである。
（4）「こんにちは」からコード変化した「ちわっす」等には，元の形にはない親しみや敬意を表す機能が生じている。
（5） 大堀壽夫（2004）の文法化の定義を参考とした。

**参考文献**

大堀壽夫（2004）「文法化の広がりと問題点」『月刊言語』Vol. 33, No. 4, pp. 26-33
沢木幹栄，杉戸清樹（1999）「世界のあいさつ言葉の対照研究に向けて」『國文学第 44 巻 6 号』pp. 126-138
重光由加（2003）「交感言語使用」『応用言語学事典』研究社，p. 235